埼玉大学紀要　教育学部，68(2)：33－47（2019）

現在の子育て支援利用者から将来の提供者へ

―地域子育て指向性と関連する子育て関連要因の分析―

笹　井　美　佐　　東京YMCA社会体育・保育専門学校
首　藤　敏　元　　埼玉大学教育学部乳幼児教育講座

キーワード：子育て支援、循環型子育て支援、子育て感情、不安対処、子育て相談

1．目的

かつての日本の子育ては地域に開かれた形で行われていた。子育てを祖父母や親戚や年長の者が手助けしたり、子育て中の親同士で互いに助け合ったりする関係性が家庭や地域にあった。しかし、家庭を取り巻く環境は、少子化、核家族化、都市化、女性の社会進出などにより大きく変化し、地縁・血縁関係も希薄化している。このような生活環境の変化は、子育て中の母子を孤立させ、母親が不安やストレスを抱えながら子育てをしていることが指摘され、多くの研究がなされている。

岡本（2015）は、地域子育て支援拠点事業が母親の育児不安の軽減に効果をあげてきたことを確認し、母親が多様な「人」とつながれるよう援助する取り組みが、育児不安の中核的な部分の軽減につながっていくというメカニズムを示した。このように、育児不安や育児ストレスに着目し、その軽減に子育て支援の役割は大きいとする研究は多いが、親の成長と関連させて子育て支援の役割を扱った研究は少ない。そこで本研究は、子育て支援を利用している者がお互いに支援者と利用者になったり（円環型）、子育てが一段落した後に、次代の子育て支援の提供者になったりする（循環型）関係性をつくり出そうとする親の特性を分析する。また、子育て支援のネットワーク、子育ての不安と喜び、子育て不安への対処スキルを取りあげ、地域での子育て支援策を主体的に活用する親の特性を明らかにし、循環型および円環型子育て支援の構築と関連する要因を考察することを目的とした。

2．研究方法

2-1　対象者

東京都内にある保育所（２園）、こども園（１園）に通うおおよそ２歳から６歳までの未就学児の養育者160名が調査に協力した。養育者の内訳は、母親154名、父親６名であった。対象者の年齢は、最年少25歳、最年長49歳であり、平均38歳であった。

2-2　調査手続き

調査時期は2018年10月の約２週間。東京都内の保育所（２園, 173名）こども園（１園, 157名）に対して職員を通して質問紙を配布した。調査用紙の回収率は、保育所95名（43.2%）、こども園65名（41.4%）であった。

2-3　調査内容

質問紙は、(1) 回答者の属性、(2) 子どもの属性、(3) 子育て支援資源としての祖父母の存在、(4) 託児支援、(5) 相談支援、(6) 子育ての不安と喜び、(7) 子育て不安への対処、(8) 地域子育て指向性の大きく８つの内容で構成された。これらは、母性意識尺度（大日向, 1988)、育児ストレス尺度（佐藤, 1994）及び対児感情尺度（花沢, 1992）を用いた育児に対する感情尺度（星野・冨永, 2013）の研究を参考に作成された。

2-4　倫理的配慮

本調査は、無記名式であり、研究以外での目的で使用しないことを明記し協力を依頼した。また、質問紙は、個人情報を保護するため個々の封筒に封入し、保育所及びこども園に通園する子どもの保護者に教職員を通して配布、回収した。さらに、本調査の結果は、窓口となる園の教職員に、個々の回答を伝えることはないことを加えて説明をした。なお、調査協力は自由意志であり、質問紙の回答と返却をもって本調査に同意を得たと判断した。

３．結果

3-1　回答者のプロフィール

分析対象者は160名であった。しかし、質問項目によって未記入（欠損値）数が異なるため、各分析において全体数は160になるとは限らない。

回答者は子どもとの母親が154人（96.3%)、父親が６人（3.8%）であった。回答者の職業は、常勤132人（82.5%)、パート７人（4.4%)、フリー５人（3.1%)、専業主婦３人（1.9%)、そして産休・育休中は12名（7.5%)、その他１名（0.6%）であった。回答者の年齢は、最年少が25歳、最年長が49歳であり、平均38.0歳であった。

子どもの年齢は、２歳児50人（31.4%)、３歳児39人（24.5%)、４歳児36人（22.6%)、５歳児34人（21.4%）であった。子どもの平均月齢は、２歳児29.40ヶ月、３歳児48.41ヶ月、４歳児59.83ヶ月、５歳児72.53ヶ月であった。子どもの性は、男児82名（51.3%)、女児75名（46.9%)、不明３名（1.9%）であった。「きょうだいがいる」と回答したものは、２歳児26/50人（52%)、３歳児22/39人（56%)、４歳児21/36人（58%)、５歳児24/34人（71%）であった。長子（出生順位上の子ども）は、２歳児では25/49人（51%)、３歳児では31/39人（79%)、４歳児では25/34人（74%)、５歳児では20/33人（61%）であった。

子育て資源としての祖父母の存在について分析したところ、祖父母が頼れる距離にいると回答したものは、62名（39.7%）であった。その内訳は、(子どもからみて）母親の祖母が同居・もしくは近所に住んでいると回答したものは40人（64.5%)、母親の祖父が同居・もしくは近所に住んでいると回答したものは、25人（40.3%)、父親の祖母が同居・もしくは近所に住んでいると回答したものは、26人（41.9%)、父親の祖父が同居・もしくは近所に住んでいると回答したものは、17人（27.4%）であった。

3-2　託児支援の特徴

保育所等での保育時間以外で「子どもの面倒を見てくれる人」が「いる」と回答したのは105名であった。「子どもの面倒を見てくれる」もしくは「特に面倒を見てくれる」という支援者の度

数と割合は表１のとおりである。

回答者の配偶者と考えられる「父親」が80人（76.2%）と大半を占めた。次いで、「祖母」が51人（48.6%)、「祖父」が20人（19.0%）であり、今回の調査協力者では，夫婦と祖父母が子育てを担っていることが分かる。

一方、家族以外では、「保育所の一時預かり」10名（9.5%)、「子育て仲間」、「ベビーシッター」がいずれも７名（6.7%)、「母・父親の友人」３名（2.9%)、「お隣・ご近所」２名（1.9%)、「ファミリーサポートセンター」１名（1.0%）であった。また、「親戚」、「幼稚園の預かり保育」、「ベビーホテル」、「事業所内保育」、「24時間託児所」についての託児支援は認められなかった。

「面倒をみてくれる」の回答を１点、「特に面倒をみてくれる」の回答を２点とし、回答者ごとに，託児支援者項目のうち家族に関係する６項目、友人・子育て仲間・近所の３項目、第三者・外注としての７項目の平均値を計算し，３種類の託児支援得点を求めた。全体での平均値は、家族託児得点がM=0.23（SD=0.24)、地域仲間託児得点がM=0.03（SD=0.10)、託児外注得点がM=0.02（SD=0.06）であった（いずれも得点は０～２の間に範囲する)。

表１　託児支援特徴における度数表

	度数	%
父親（お子様からみて）	80	(76.2%)
母親（お子様からみて）	10	(9.5%)
祖母（お子様からみて）	51	(48.6%)
祖父（お子様からみて）	20	(19.0%)
母・父親のきょうだい（お子様からみ	9	(8.6%)
親戚	0	(0.0%)
母・父親の友人（お子様からみて）	3	(2.9%)
子育て仲間	7	(6.7%)
お隣・ご近所	2	(1.9%)
ベビーシッター	7	(6.7%)
保育所の一時預かり	10	(9.5%)
幼稚園の預かり保育	0	(0.0%)
ベビーホテル	0	(0.0%)
事業所内保育	0	(0.0%)
24時間託児所	0	(0.0%)
ファミリーサポートセンター	1	(1.0%)
「いる」と回答した人は105名	200	(190.5%)

（注）複数回答であるため合計は100を越える。

3-3　相談支援の特徴

相談支援11項目の評定値の平均値は表２に示されている。得点の範囲は１点から５点であり、得点が高いほど相談支援対象への依頼頻度は高い。

相談支援11項目について因子分析（重みづけのない最小２乗法・プロマックス法）を行った。因子数は、表３にみられるように、固有値１以上とし、固有値の変化と因子の解釈可能性を考慮し、４因子が抽出された。第１因子は、「育児雑誌等の企業の相談を利用する」、「NPOや教育委員会等の電話利用する」の２項目で構成されている。相談先が、企業やNPOといった、子育て家族（相談者）とこれまでに直接的なかかわりがなかったとされることや、それらの関係性から客観的視点から支援が得られるのではないかと考え、「第３者」と命名した。第２因子は、「公民館等を活動の場とする子育てサークルやサロンのスタッフや仲間に相談する」、「児童館やファミリーサポートセンターのスタッフに相談する」の２項目で構成されている。公民館や児童館は、地域において育児不安に陥りがちな子育て中の親への支援活動を、児童厚生員や保育士等の専門家が行ってい

ることから、「地域支援者（専門家）」と命名した。第３因子は、「保育所・幼稚園の先生に相談する」、「病院などの医療・心理関連の専門機関に相談する」、「育児書で調べる」、「インターネット（WEB、ブログ、日記、メール）などを検索したり相談したりする」の４項目で構成されている。保育所や病院では、担当保育士やかかりつけ医がいることを想定した。また、ベネッセ（2011）による調査によると、特に20代の若い世代ではインターネットや育児雑誌から情報を得ることが多い傾向があるとの調査結果を踏まえ、それらは身近に存在する専門的視点からの支援が得られるのではないかと考え「専門アドバイザー」と命名した。第４因子は、「親に相談する」、「子育て仲間に相談する」、「配偶者・パートナーに相談する」の３項目で構成されている。親、子育て仲間、配偶者、パートナー等、極めて身近にいる存在としての支援者として考えられたことから「家族・仲間」と命名した。

相談支援の特徴の３つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出したところ、「第３者」相談得点（M=1.05, SD=0.28）、「地域支援者（専門家）」相談得点（M=1.49, SD=0.70）、「専門アドバイザー」相談得点（M=2.74, SD=0.72）、「家族・仲間」相談得点（M=3.39, SD =0.78）であった。

表２　相談支援の項目ごとの平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
①育児書で調べる	2.24	1.12
②親に相談する	2.89	1.26
③配偶者・パートナーに相談する	3.87	1.25
④インターネット（web、ブログ、日記、メール）などを検索したり相談したりする	3.84	1.13
⑤子育て仲間に相談する	3.42	1.10
⑥児童館やファミリーサポートセンターのスタッフに相談する	1.60	0.85
⑦公民館等を活動の場とする子育てサークルやサロンのスタッフや仲間に相談する	1.38	0.75
⑧病院などの医療・心理関連の専門機関に相談する	1.86	1.06
⑨保育所・幼稚園の先生に相談する	3.05	1.14
⑩NPOや教育委員会等の電話相談を利用する	1.06	0.31
⑪育児雑誌等の企業の相談を利用する	1.05	0.29

表３ 相談支援に関する因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
	第3者	地域支援者	専門アドバイザー	家族・仲間
育児雑誌等の企業の相談を利用する	**0.93**	0.00	-0.14	0.03
NPOや教育委員会等の電話相談を利用する	**0.88**	0.06	0.08	0.11
公民館等を活動の場とする子育てサークルやサロンのスタッフや仲間に相談する	0.03	**0.81**	0.01	-0.04
児童館やファミリーサポートセンターのスタッフに相談する	0.03	**0.65**	0.05	0.04
保育所・幼稚園の先生に相談する	-0.10	0.22	**0.55**	0.20
病院などの医療・心理関連の専門機関に相談する	0.03	0.27	**0.55**	-0.17
育児書で調べる	0.06	-0.02	**0.43**	0.01
インターネット（web、ブログ、日記、メール）などを検索したり相談したりする	-0.13	-0.14	**0.41**	0.04
親に相談する	0.18	-0.05	0.13	**0.51**
子育て仲間に相談する	-0.15	0.28	-0.30	**0.41**
配偶者・パートナーに相談する	-0.01	-0.24	0.39	**0.34**
因子相関	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
第1因子　第3者	1.00	0.29	0.16	-0.28
第2因子　地域支援者	0.29	1.00	0.07	0.02
第3因子　専門アドバイザー	0.16	0.07	1.00	0.09
第4因子　家族・仲間	-0.28	0.02	0.09	1.00

3-4　子育てのイライラ

子育てが思うようにいかず、イライラしたり考え込んだりすることのある回答者は、「少しある」が48名（30.4%)、「時々ある」が57名（36.1%)、「頻繁にある」が16名（10.1%）であった。76.6%の回答者が日常的な子育ての不安症状を経験していることが分かった。

3-5　子育ての不安と喜び

子育ての不安内容と子育ての喜びの13項目について項目分析を行い、１項目を除いた12項目について因子分析することにした。表４は12項目の評定値の平均値と標準偏差を示している。得点は１点から５点であり、得点が高いほど子育ての不安内容と喜びの程度も高い。

表４　子育ての不安と喜びにおける平均値と標準偏差

n=157

	平均値	標準偏差
子どもが言うことを聞かず困っている	2.70	0.94
子どもの言葉や成長について悩みがある	2.15	1.10
子どもの睡眠や食事についての悩みがある	2.61	1.13
子育ての仕方について悩みがある	2.53	0.94
小学校教育や幼児教室について相談したいことがある	2.21	1.03
子育てに必要な経費，就学の費用について心配がある	2.38	1.17
相談できる相手がいない	1.81	0.99
相談できる場所がない	1.76	0.99
子育ての悩みを共有・共感してもらえない	1.81	0.95
近所の人の目が気になる	1.73	0.94
子どもがかわいいと感じる	4.68	0.63
子どもとともに自分も成長していると感じる	3.97	1.02

(注)「一人の時間がない」は項目分析で削除された。

子育ての不安と喜び12項目について因子分析（重みづけのない最小２乗法・プロマックス法）を行った。表５にみられるように、因子数は、固有値１以上とし、固有値の変化と因子の解釈可能性を考慮し、３因子が抽出された。

第１因子は、「相談できる相手がいない」、「相談できる場所がない」、「子育ての悩みを共有・共感してもらえない」、「近所の人の目が気になる」、「子育てに必要な経費・就学に必要な経費について心配がある」の５項目で構成されており、これらは、育児を一人で担っていることや他人には相談しづらい内容が含まれていることから「孤立した子育て」と命名した。第２因子は、「子育ての仕方について悩みがある」、「子どもが言うことを聞かず困っている」、「子どもの睡眠や食事についての悩みがある」、「子どもの言葉や成長について悩みがある」、「小学校教育や幼児教室について相談したいことがある」の５項目で構成されており、しつけや育て方といった子育て方針や子育て観による悩みであることから「しつけ・育て方不安」と命名した。第３因子は、「子どもとともに自分も成長していると感じる」、「子どもがかわいいと感じる」の２項目から構成されており、子育てをしていく中で、子どもの存在を愛おしく感じ、親としての自覚が芽生え、子どもの成長と共に自らも成長しているとの感情から「親の成長感」と命名した。

相談支援の特徴の３つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出した。「孤立した子育て」得点はM=1.90, SD=0.78、「しつけ・育て方不安」得点はM=2.44, SD=0.68、「親の成長感」得点はM=4.33, SD=0.68であった。

表５　子育ての不安と喜びにおける因子分析結果

	第1因子 孤立した 子育て	第2因子 しつけと 育て方不安	第3因子 親の 成長感
相談できる相手がいない	**.958**	-.079	.040
相談できる場所がない	**.936**	-.105	.039
子育ての悩みを共有・共感してもらえない	**.787**	.041	-.160
近所の人の目が気になる	**.461**	.153	-.073
子育てに必要な経費，就学の費用について心配がある	**.310**	.285	.220
子育ての仕方について悩みがある	.136	**.677**	-.003
子どもが言うことを聞かず困っている	-.060	**.587**	-.106
子どもの睡眠や食事についての悩みがある	-.095	**.583**	.040
子どもの言葉や成長について悩みがある	.006	**.558**	-.086
小学校教育や幼児教室について相談したいことがある	.102	**.350**	.150
子どもとともに自分も成長していると感じる	-.028	-.037	**.662**
子どもがかわいいと感じる	-.015	.021	**.537**

因子相関		第1因子	第2因子	第3因子
第1因子	孤立した子育て	1.000	.447	.020
第2因子	しつけと育て方不安	.447	1.000	-.234
第3因子	親の成長感	.020	-.234	1.000

3-6　子育ての不安への対処の特徴

子育ての不安への対処11項目について、各質問の得点が高いほど、子育ての不安への対処の程度が高くなるように得点化した（得点範囲は１点から５点）。表６は項目ごとの平均値と標準偏差を示している。

表６　子育ての不安への対処における平均値と標準偏差

n=158

	平均値	標準偏差
子どもを怒鳴りつける	2.96	1.07
子どもをしつけとして叩く	1.73	0.89
子育て仲間と電話で話す	1.63	0.95
友人と会っておしゃべりをする	2.93	1.21
がまんする	3.24	1.20
好きな物を食べる	3.23	1.23
インターネットやメール、ゲーム(携帯電話・スマートフォン含)で気を紛らわす	2.94	1.25
買い物をする（ネットショッピングを含む）	2.65	1.23
誰かに相談をする	3.27	1.18
ドライブや読書等、好きなことをする	2.72	1.23
子どもをどこかに預けて一人の時間をつくる	2.25	1.22

子育ての不安への対処11項目について因子分析（重みづけのない最小２乗法・プロマックス法）を行った。因子数は、表７にみられるように、固有値１以上とし、固有値の変化と因子の解釈可能性を考慮し、４因子が抽出された。第１因子は、「子どもをどこかに預けて一人の時間をつくる」、「ドライブや読書等、好きなことをする」、「友人と会っておしゃべりをする」の３項目で構成されており、他の物事に関心を向け気分を晴らすなどの行為から、「気晴らし」と命名した。第２因子は、「インターネットやメール、ゲーム（携帯電話・スマートフォン含）で気を紛らわす」、「好きな物を食べる」、「買い物をする（ネットショッピングを含む）」、「がまんする」の４項目で構成されていた。これらの項目は、不安をインターネットやメール、嗜好食品を食することや買い物をすることで解

消したり、それとは逆に、不安感を我慢することで抑圧したりする対処法である。これらの方法は「ネット依存」や「買い物依存」のように依存化しやすい特徴を有することから、「依存的」と命名した。第３因子は、「子どもをしつけとして叩く」、「子どもを怒鳴りつける」の２項目から構成されており、子どもに対して衝動的に、あるいは正当な根拠なく感情をうまくコントロールできないという行為から、「感情爆発」と命名した。第４因子は、「子育て仲間と電話で話す」、「誰かに相談をする」の２項目から構成されており、第３者に話をしたり、相談したりすることで、現状を良くしていこうと積極的な態度で臨む行為から、「建設的」と命名した。

不安対処の特徴の４つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「気晴らし」得点（M=2.63, SD=0.91）、「依存的」得点（M=3.02, SD=0.85）、「感情爆発」得点（M=2.34, SD=0.83）、「建設的」得点（M=2.45, SD=0.84）とした。

表７　子育ての不安への対処における因子分析結果

	第1因子 気張らし	第2因子 依存的	第3因子 感情爆発	第4因子 建設的
子どもをどこかに預けて一人の時間をつくる	**.839**	-.162	.002	-.208
ドライブや読書等、好きなことをする	**.499**	.088	.059	.017
友人と会っておしゃべりをする	**.474**	-.141	-.049	.389
インターネットやメール、ゲーム(携帯電話・スマートフォン含)で気を紛らわす	-.028	**.674**	.058	.093
好きな物を食べる	.141	**.614**	-.079	-.108
買い物をする（ネットショッピングを含む）	.322	**.452**	.034	.110
がまんする	-.234	**.451**	-.001	-.035
子どもをしつけとして叩く	.025	-.124	**.820**	.088
子どもを怒鳴りつける	.006	.149	**.568**	-.141
子育て仲間と電話で話す	-.207	-.003	-.001	**.687**
誰かに相談をする	.203	.027	-.034	**.347**
因子相関	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
第1因子　気張らし	1	0.546	0.127	0.505
第2因子　依存的	0.546	1	0.232	0.305
第3因子　感情爆発	0.127	0.232	1	0.098
第4因子　建設的	0.505	0.305	0.098	1

3-7　地域子育て指向性

地域子育て指向性７項目について、各質問の得点が高いほど、地域子育て指向性の程度が高くなるように得点化した（得点範囲は１点から５点）。表８は項目ごとの平均値と標準偏差を示している。

地域子育て指向性項目について因子分析行った結果、一因子構造であることが確認できた。７項目の評定値の合計得点を地域子育て指向性得点（範囲は７点から35点）として算出した。地域子育て指向性得点の平均値は20.79（*SD*=5.03）であった。得点分布は図１に示されている。クロンバックのα係数を計算したところ、α=.756という比較的高い値が得られた。地域子育て指向性尺度の内部一貫性は高いといえる。

地域子育て指向性と子育ての支援関連要因、および子育ての不安関連要因との関係を分析するために、地域子育て指向性得点の高群と低群を設定した。つまり、得点の平均値より0.5*SD*（得点は25.0）高い群）を高群、0.5*SD*（得点は18.0）低い群を低群とした。地域子育て指向性の高群は49名、低群は51名であった。

表８　地域子育て指向性における平均値と標準偏差

n=158

	平均値	標準偏差
子どもを預けたり、預かったりする地域での「保育仲間」が大切だと思う	3.72	1.089
子どもと地域の図書館や児童館や公民館に行くのが楽しい。	3.07	1.216
子育ての経験を発信していきたい	2.27	1.104
子育てを通じて、仲間作りをしていきたい	2.95	1.161
子育てについて、他の人から学びたい	3.25	1.094
子育て支援策を活用したい	3.21	1.047
いずれ子育て支援者になりたい	2.32	1.185

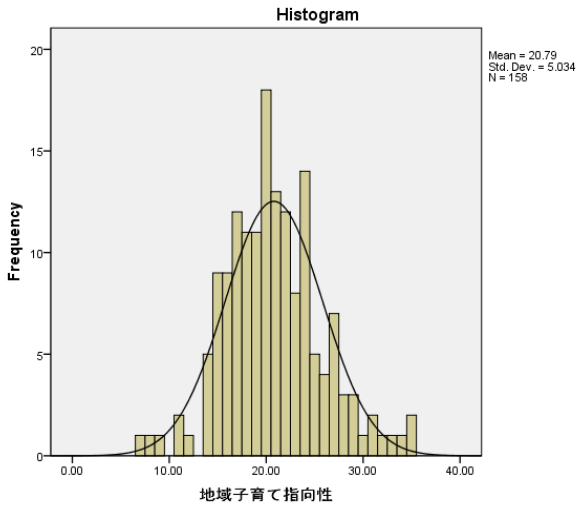

図１　地域子育て指向性得点の度数分布表

3-8　地域子育て指向性と家族要因との関連

家族要因である「回答者の年齢」、「子どもの年齢」、「子どもの数」、「出生順位」と地域子育て指向性との関連がみられるのかについて、ピアソンの相関係数を用いて検討したところ、いずれの相関係数（*r*s<.1）も有意ではなかった。

次に、地域子育て指向性と資源としての祖父母の存在との関連がみられるかについて、クロス集計を用いて検討した。まず、祖父母が頼れる距離にいるか否かでは、地域指向性低群の52人のうち「いる」と回答したのが20人（38.4%）、地域子育て指向性高群49人のうち「いる」と回答したのが16人（32.6%）であった。χ^2検定の結果、この差は有意ではなかった。

また、こどもからみて母方の祖母が同居もしくは近所にすんでいるか否かでは、地域指向性低群の52人のうち「いる」と回答したのが12人（23.0%）、地域子育て指向性高群49人のうち「いる」と回答したのが８人（16.3%）であった。χ^2検定の結果、この差は有意ではなかった。さらに、母方の祖父が同居もしくは近所にすんでいるか否かでは、地域指向性低群の52人のうち「いる」と回答したのが７人（13.4%）、地域子育て指向性高群49人のうち「いる」と回答したのが７人（14.2%）であった。χ^2検定の結果、この差は有意ではなかった。

そして、子どもからみて父方の祖母が同居もしくは近所にすんでいるか否かでは、地域指向性低群の52人のうち「いる」と回答したのが９人（17.3%）、地域子育て指向性高群49人のうち「いる」と回答したのが８人（16.3%）であった。χ^2検定の結果、この差は有意ではなかった。また、

父方の祖父が同居もしくは近所にすんでいるか否かでは、地域指向性低群の52人のうち「いる」と回答したのが５人(9.6%)、地域子育て指向性高群49人のうち「いる」と回答したのが６人(12.2%)であった。χ^2検定の結果、この差は有意ではなかった。

3-9　地域子育て指向性と託児支援との関連

託児支援要因である「家族親類」、「地域仲間」、「外注」、と地域子育て指向性との関連がみられるのかについて、ピアソンの相関係数を用いて検討したところ、いずれの相関係数（$rs<.1$）も有意ではなかった。

3-10　地域子育て指向性と相談支援との関連

相談支援要因である「第３者」、「地域専門」、「専門アドバイザー」、「家族仲間」と地域子育て指向性との関連がみられるのかについて、ピアソンの相関係数を用いて検討した。

表９のように、地域子育て指向性と「第３者」および「専門アドバイザー」との相関は有意ではなかった。一方、地域子育て指向性と「地域専門家」および「家族仲間」との間にはプラスの有意な相関が認められた。

表９ 地域子育て指向性と託児支援との関連

	第3者	地域専門家	専門アドバイザー	家族仲間
相関係数	.090	.215	.019	.159
有意水準		**		*
n	155	154	155	153

＊ $p<.05$　＊＊ $p<.01$　＊＊＊ $p<.001$

3-11　地域子育て指向性と子育て不安との関連

子育て不安要因である「イライラ感」、「成長・育て方」、「孤立」、「成長感」と地域子育て指向性との関連がみられるのかについて、ピアソンの相関係数を用いて検討した。

表10のように、地域子育て指向性と「成長・育て方」および「孤立」との相関は有意ではなかった。一方、地域子育て指向性と「イライラ感」とはマイナスに相関し、「親の成長感」とはプラスに相関していた。いずれの相関係数も統計的に有意になった。

表10　地域子育て指向性と子育て不安との関連

	イライラ感	成長・育て方	孤立	成長感
相関係数	-.185	.064	-.009	.294
有意水準	*			***
n	156	156	158	158

＊ $p<.05$　＊＊ $p<.01$　＊＊＊ $p<.001$

次に、子育て不安の対処方略要因である「気晴らし」、「依存的」、「感情爆発」、「建設的」と地域子育て指向性との関連がみられるのかについて、ピアソンの相関係数を用いて検討した。

表11のように、地域子育て指向性と「気晴らし」および「感情爆発」との相関は有意ではなかった。一方、地域子育て指向性と「依存的」の間には有意になる傾向のマイナスの、「建設的」との間には有意になる傾向のプラスの相関が認められた。

表11　地域子育て指向性と子育て不安の対処方略要因との関連

	気晴らし	依存的	感情爆発	建設的
相関係数	-.019	-.149	-.095	.136
有意水準		+		+
n	158	157	158	158

+ p<.1　* p<.05　** p<.01　*** p<.001

3-12　子育て指向性を規定する要因

地域子育て指向性を規定する子育て支援関連要因と子育て不安関連要因を探るために、地域子育て指向性を従属変数とし、「回答者の年齢」、「子どもの数」、「子どもの月齢」を統制要因、子育て支援関連要因と子育て不安関連要因を独立変数とした重回帰分析を実施した。

まず、子育て支援連要因として、託児支援の３つの尺度得点（家族・親類、地域仲間、外注）と相談支援の４つの尺度得点（第三者、地域専門家、専門アドバイザー、家族仲間）を回帰式に一度に投入した。表12にあるように、回帰式は５パーセント水準で有意となった。独立変数の標準偏回帰係数（β係数）をみると、託児支援変数はどれも有意ではなく、相談支援の「地域専門家」と「家族仲間」がプラスに有意な影響を与えていた。

表12　地域子育て指向性を従属変数，子育て支援関連要因を独立変数とした重回帰分析の結果

				子育て不安と喜び			子育て不安への対処			
	回答者年齢	子どもの月齢	子どもの数	しつけ・育て方不安	孤立した子育て	親の成長感	気晴らし対処	依存的対処	感情爆発	建設的対処
β係数	.010	-.028	.017	.206 *	-.002	.279 **	-.017	-.200 *	-.066	.126

重相関係数　R=.386　$R2$=.149　F(10,137)=2.40, p<.05

次に、子育て不安関連要因として、子育ての不安と喜びの３つの尺度得点（しつけ・育て方不安、孤立した子育て、親の成長感）、子育て対処の４つの尺度得点（気晴らし、依存的、感情爆発、建設的）を回帰式に一度に投入した。表13にあるように、回帰式は５パーセント水準で有意となった。独立変数の標準偏回帰係数（β係数）をみると、「しつけ・育て方不安」と「親の成長感」がプラスに影響し、「依存的」な対処がマイナスに影響していた。

表13　地域子育て指向性を従属変数，子育て不安関連要因を独立変数とした重回帰分析の結果

				託児支援			相談支援			
	回答者年齢	子どもの月齢	子どもの数	家族	地域仲間	外注	第三者	地域専門家	専門アドバイザー	家族仲間
β係数	.128	-.060	-.078	-.063	.023	-.083	.033	.288 **	-.078	.182 *

重相関係数　R=.360　$R2$=.130　F(10,137)=2.01, p<.05

4．考察

本研究では、保育所やこども園に通園する子どもの養育者、つまり働きながら子育てを行っている者を主な対象者として、質問紙を通して現代社会における子育ての状況や感情、子育て支援の活用や利用状況等を概観していくことにした。

そして、それらを踏まえ、必要とされる子育て支援策を探り、今後、地域での子育て支援策の主体的な活用を通して、循環型子育て支援が構築されるべく要因を分析したいと考えた。

まず、託児支援資源についてである。祖父母の存在については、先述したように、子育ても次代へと継いでいくものであるという時代的背景があったことや、高齢社会白書（内閣府, 2005）において、母親の相談相手として、夫の次に実母を挙げて頼りにしている、との報告から、祖父母を頼りにしながら子育てを担っているという回答への高い値を予想していた。そして、本調査においても、回答者の配偶者と考えられる父親に次いで祖母、祖父と続き、高い値を示す結果が得られた。つまり、さまざまな託児支援環境があるにも関わらず、夫婦・祖父母といった家族・血縁者という小さなネットワークの中だけで子育てを循環させていることになる。

しかし、見方を変えてみると、このような家族の在り方は、形こそ異なるが、家族・血縁者を頼りにするという点においては、今も昔も変わらないといえるかもしれない。とするならば、「少子高齢化」といわれる現代社会において、高齢者を大切な子育て支援資源として、今後考えていくことで、社会全体で子育てを担っていく、という現代版家庭モデルとしての子育てネットワークが構築されていくと考える。

次に注目すべきは、「子どもの面倒を見てくれる人」が「いない」との回答も比較的高い値を示しているということである。特に本調査の対象者の多くは働きながら子育てをしている者(有識者)である。このような状況において、子育てと仕事との狭間で、一人で何とかしようとする苦しい状況が容易に想像できる。そして子育ての意識は自分を軸にし、内へ内へと向かっていく傾向があると考えられる。

このようなことから、家族・血縁者と立場を異にした第三者の介入により、子育て意識を家庭外にも向けていきながらネットワークを広げていくことの必要性があると考え、ファミリーサポートセンターの役割が非常に重要になってくるのではないかと思われる。

次に、相談支援の特徴についてである。数井･無藤･園田 (1996)、芳賀 (2001)、寺見ら (2008) の先行研究にもみられるように、本調査においても、回答者の配偶者・パートナーに相談するという回答に高い値を示した。そしてこの結果は、先述した託児支援の結果を反映するものであると考える。一方で、祖父母に対する値は託児支援の結果を踏まえると、それほど高い値ではなかった。これは、本調査の調査過程においても、回答者の配偶者である両親（子どもからみて祖父母）との関わりにストレスを感じていることが示唆されている。祖父母と共に必ずしも子育てを一体化して行っているのではなく、「預ける」ということと「相談する」ということを切り離して考え必要に応じて支援を求める、このことが、今と昔との大きな違いと言えるのかもしれない。

さらに、子育て仲間に相談するとの回答は、比較的高い値を示している。これは、本調査の対象者が保育所・こども園の養育者であったということが起因しているとも考えられる。また、「子育て」という共通のネットワークを通じて、悩みや不安を相談し、共感・共有することで仲間意識が強まり、身近な繋がりを感じ安心感が得られるものだと思われる。つまりこれは、横社会の繋がりを強くしていくものと考えられ、円環型子育て支援となり得るものであろう。

そして、その結果に付随するように、保育所や幼稚園の先生に相談する、という回答が、他の専門機関の約２倍の値を示している。これは、毎日顔を合わせ直接的な関わりを持ちながら、子育てを一体的に担っていくことで、互いの信頼関係が芽生えることや、さらには子育ての身近な専門家として安心して相談できるということではないかと考える。

ここまでは、対「人」との相談支援要因であったが、物や媒体を介しての相談支援、つまりイ

ンターネット（WEB、ブログ、日記、メールなど）を介して行うという回答が、先述した配偶者・パートナーとほとんど同値であった。これは、スマートフォンの普及が大きく影響していると考えられる。今や、インターネット（WEB、ブログ、日記、メールなど）は、とても身近に存在している大切なツールでもあり、また「スマホ子育て」と言われるほどに、子育てとも大きく関係をしている。そこで、このようなツールを最大限に活かした子育て支援を構築していくことで、世代や年齢、あるいは地域・社会に限定せずに、幅広い支援の可能性が広がっていくのではないかと考える。しかし、このようなツールに関して否定的な意見もあることも事実であるため、その利用方法には十分な検討が必要であろう。

このような結果から、相談支援において、「身近」「繋がり」を感じることが子育て支援の大きな柱だといえる。

それでは、実際には、子育てについてどのようなことに不安や喜びを感じているのだろうか。

まず、76.6％もの回答者が日常的にイライラしたり考え込んだり、という不安症状を感じていると回答している。そして、さらに、しつけや育て方、また将来のことなど、子どもに関わる具体的な内容をあげ質問をしたところ、これらに数値的な差はあまりみられなかった。

しかしながら、本調査において、年齢別での統計をとっていないため、年齢によってその内容が変わってくるのか否か、詳しく研究することはできなかった。それらを明確にすることで、子どもの成長に見通しがもてるようになり、子どもの受けとめ方やその対処法にも現在とは違ったかかわりができるようになる可能性もあるであろう。一方、「相談できる相手や場所がない」とする、自分に関わる内容についての不安さは、ここではあまりみられなかった。

そして、さまざま悩みの内容を抑えて、「子どもがかわいいと感じる」また「子どもとともに自分も成長している」ということに高い値を示した。養育者がそのように実感できた時、初めて「親」としての自覚をし、子育てをしている自分自身を認められるようになるのではないかと考える。そしてそれはまた、「親」としての有能感や自信へと繋がっていくものであると考える。そうした感情が次世代を生み出し、繋がっていくという循環が生まれていくと思われる。本調査においては、どのような場面でそのように感じるのかまでは調査することができなかった。しかし、具体的な場面を明らかにすることで、子育ての喜びが感じられるようなアプローチや支援策が行えるのではないかと考える。

さらに、それらの不安感情に対する対処法であるが、「誰かに相談をする」ということに最も高い値を示した。次いで、「がまんする」、「好きなものを食べる」といった項目があげられた。これまで「人」との「繋がり」を求め感じることで、安心感を得、子育て不安への様々な要因に対処するということを主に述べてきた。もちろんその結果に相違はなかったが、一人で対処をしようと考える養育者も多くいるということである。これは一過性のものであり、根本的な対処法ではない。それ故に、その感情が蓄積され、いずれ爆発してしまう可能性も含まれていると感じる。現に、「子どもをしつけとして叩く」、「子どもを怒鳴りつける」といった行動をやむなくとってしまっている養育者もいるのである。これは、虐待にまでつながる恐れもあることから、慎重かつ早急に対応していかなければならない。また、未然に防げるよう、定期的に家庭を訪問することや、外部施設を利用するように働きかけたり、またそうなるような企画を考えたりし、気持ちが外に向けられるよう提案していくことが必要であろう。

このようなことを踏まえた上で、地域循環型子育て支援策を構築していくにはどのようにしたらよいかを探っていきたい。

まず、地域指向性を高めるためには、子育ての喜びを感じるというポジティブ感情と共に、不安を感じるというネガティブ感情もまた重要である。その感情を行き来することで、「子どもと共に成長している」と実感できるのかもしれない。

そこで、こうした大切な瞬間を見逃さないようにするためには、子どもと向き合える十分な時間の確保が必要であると考える。子育ての基盤となる家庭の機能をしっかりと果たせるような支援策を行うことで、「家族」一人一人の役割が活かされることが重要となるのではないのだろうか。

そしてそのような家庭の機能を踏まえた上で、本調査からも明らかになったように「繋がり」つまりは、子育てのネットワークを高めていくことが必要となる。そこで、有効な要因として、「地域専門家」や「仲間」の存在が上げられる。本調査の回答者は、保育所やこども園に通園していることが影響し、特に保育者の存在を頼りにしているという結果が得られた。このように、身近に感じられる専門家の存在は確かに大きい。そのため、今回改訂された『保育所保育指針第６章３.』にも「地域子育て支援」が明記されている。保育者は、保育という専門性を十分に活かした子育ての支援をより有効に行っていく必要がある。そのための方法の１つとして、保育所等に通園する保護者を介してネットワークを広げていくのである。そうすることで、縦型世代のネットワーク、つまり循環型が、そして横型世代のネットワーク、つまり、円環型のネットワークの双方の裾野が広がると考えられ、地域子育て指向性を高めるべく「地域専門家」と「仲間」とが有益に影響するものと考える。

さらに、本調査を実施した保育所やこども園の周辺及び同建物内に、学童クラブや児童館が設置されている。本調査における回答者の多くは、働きながら子育てを行っているため、時間的にもなかなか他の施設を利用することが難しい状況ではある。しかしながら、「地域専門家」を頼りにしていることに加え、子育て支援を長い視野をもって見つめていくのであれば、保育所やこども園等の卒園後の支援策をも探っていく必要がある。循環型子育て支援を考える時、支援者同士の連携も必要不可欠であり、そうすることにより、連続した子育て支援を行えるようになる。そういった意味では、出産前、また出産後の育児休暇中の養育者に対して育児不安・育児ストレスを感じる前の早期段階で支援を働きかけることも必要であろう。

以上、本研究において、循環型子育て支援を構築すべく、現在の子育てや子育て支援状況、またその要因については、明らかにすることはできた。しかしながら、それらをどのように活用していくのか、という具体策にまで言及することはできなかった。

また、調査を実施した地域は、都市開発が進められ、若者や子育て世代が増加している地域である。そのため、本調査結果に、若干の偏りがみられることも考えられる。しかしながら、都市化、少子化、核家族化といった現代社会における子育て状況を考えるには有効であったと考える。

以上のようなことから、地域また対象者の幅を広げ、様々な子育て感情を深く追求し、さらにそれらを踏まえた循環型子育て支援策の具体的な内容を提案していくことが、今後の課題である。

文献

ベネッセ教育研究所.（2011）. 第４回子育て生活基本調査（小中版）https://berd.benesse.jp/ shotouchutou/research/detail1.phpid=3278（2019/01/15最終アクセス）

花沢成一.（1992）. 母性学研究. 医学書院

芳賀道.（2001）. 母親の育児ストレスに対する父親のソーシャル・サポートの緩衝効果について. 中央大学大学院年報, 30, 211–218.

星野美穂子・冨永由佳.（2013）. 育児に対する感情と子育て支援に求めるニーズとの関係―未就学児の母親を対象として―聖徳大学幼児教育専門学校研究紀要, 5, 33-39.

数井みゆき, 無藤隆, & 園田菜摘.（1996）. 子どもの発達と母子関係・夫婦関係: 幼児を持つ家族について. 発達心理学研究, 7(1), 31-40.

内閣府.（2005）. 平成17年版高齢社会白書 https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w2005/ zenbun/ 17index.html (2019/01/15最終アクセス)

大日向雅美.（1998）. 母性の研究. 川島書店

岡本聡子.（2015）. 母親の育児不安解消における地域子育て支援拠点事業の効果利用者アンケートを通じた測定と検証. 創造都市研究（eJournal of Creative Cities), 10(1).

佐藤達哉（1994）. 育児に関するストレスとその抑うつ重症度との関連. 心理学研究, 64(6), 409-416.

寺見陽子・別府悦子・西垣吉之・山田陽子・水野友有・金田環・南憲治.（2008）. 今日の母親の育児経験とソーシャル・サポートの関連に関する研究（1）. 中部学院大学・中部学院短期大学部研究紀要, 9, 59-71.

謝辞

本研究を進めるにあたり、多くの皆様に大変お世話になりました。心より感謝を申し上げます。特に、東京YMCAチャイルドケア事業部および保育園・こども園の園長先生を始め教職員の皆様には、質問紙調査にご快諾頂いたばかりか、アンケート回収ボックスの設置など、ご協力を頂き大変感謝をしております。また、通園されている保護者の皆様におかれましては、大変お忙しい中、ご丁寧にご回答頂き、本当に有難うございました。心より御礼申し上げます。

(2019年３月22日提出)
(2019年４月19日受理)

Changing from users of childcare support to future support providers

— Factors related to community-based child-rearing —

Misa SASAI
Course Specialized in Childcare, Tokyo YMCA College of Physical and Early Childhood Care Education
Toshimoto SHUTO
Faculty of Education, Saitama University

Abstract

Circulation-type childcare support implies that the users of childcare support become providers of support. This study was designed to collect fundamental data to investigate the characteristics of parents raising children, which might lead to the development of a society with circulation-type childcare support. Proactive utilization of childcare support measures and motivation for becoming future supporters were defined as the "orientation for community-based child-rearing." Then, a survey was conducted with parents having children enrolled in two nursery schools and one early childhood education and care center (N = 160). The participants responded to the following question items; 7 items on the orientation for community-based child-rearing, 16 items on childcare support, 11 items on childcare consultation, 12 items on child-rearing anxiety, and 11 items on anxiety coping strategies. Results indicated that the orientation for community-based child-rearing had a one-factor structure. Significant positive correlations were indicated between the orientation score and the tendency to consult practitioners of community-based child-rearing support as well as the sense of growth as a parent. Moreover, the orientation score was negatively correlated with parents' feelings of irritation about childcare. Multiple regression analysis was conducted with orientation for community-based child-rearing as a dependent variable and scores of childcare-support and consultation-support as independent variables, which indicated a significant β coefficient of the tendency to consult family members and practitioners of community-based child-rearing support, even after excluding the effects of children's age in months and gender. Moreover, the results of multiple regression analysis with the scores of feelings about child-rearing and anxiety coping strategies as independent variables indicated that the anxiety about child-rearing methods and the sense of growth as a parent positively affected the orientation for community-based child-rearing, whereas "dependent" anxiety coping negatively affected orientation. It is suggested that childcare supporters in local communities play an important role in facilitating orientation for community-based child-rearing. Furthermore, it is considered essential to feel a sense of growth as a parent, which is obtained by sharing worries and anxieties related to child-rearing among peer parents and overcoming them.

Keywords: childcare support, circulation-type child-rearing society, feelings about child-rearing, anxiety coping, childcare consultation